

山口哲言子全集

第二卷

水原秋桜子
富安風生
山口青邨

大野林火
平畑静塔

監修

明治書院

山口哲子全集

第一卷
俳句集(二)

山口誓子全集 第二卷

三八〇〇円

著者 山口 誓子

昭和五十二年三月二十五日發行

發行者 明治書院 代表 三 樹 彰

印刷者 大日本法令印刷 代表 田 中 忠

發行所 株式會社 明治書院

千代田區神田錦町一―十六八一〇一V
電話二九四―五三三六 振替東京三一四九九一

山口誓子 第二卷 俳句集(二)

目次

激浪
遠星

一

一六七

初出百句	三〇三
解題	三〇七
解説	三二四
松井利彦	三〇七
平畑静塔	三二四

激

浪

寄誓子

川 田 順

自ら負ふわれにはあれどわれよりも二十年はたとせ
若き君をたふとふ

才あるは病多しとむかしよりいひける言をざえ やまひ こと
君に悲しふ

現身は弱く生まれてむらぎもの心さやけきうつそみ
君をよろこぶ

十あまり七つの文字の短きに君がこめたる
いのち長けむ

昭和十七年

明治節

鳳輦をの峯越こしを思ふ明治節

御膳水を存する小學校あり

子等いまも御井みゐをいたたく明治節

過ぎましし海道に立つ明治節

明治節行^み幸^{ゆき}の鼓笛聞ゆかに

一 歳

想ひ出づ歴史の中に雪降り

松

高きより雪降り松に沿ひ下^{くだ}る

しづかなる寢覺めの松や寒雀

神 宮

外宮多賀宮

冬寂びてなほ青谷ぞ荒御魂

書を移していまは落葉す林崎

落合

冬川の合へば青淵畏きかも

冬磧河合に稱辭たたへを宣のる

内宮一の鳥居

楠くすは實を地にして神の樹なりけり

楠の實のその樹のもとに息ととのふ

手洗場

青淵の冬動けるに嗽くちすすぐ

海畔抄

晝中の白き刻のみ春の蟬

黒土にまぎるるばかり葺濃し
紫蘇の汁なほ點々と陰に入る
紅くあかく海のほとりに梅を干す
燕つばくらの尾さきさきばける下通る
その芍薬欲しと搬車につきゆけり
日々わたる踏切も暑をきざしけり
白浪に向きて書を読む夏は佳し
干梅の上來る酸の風絶えず

紅き紙^た鳶^こ炎天深く掲げたり
この大き踏切夜涼殺到す
冷し馬海に鼻筋白く佇つ
冷し馬たてがみ波をやりすごし
冷し馬上りて終にかへりみず
鬼灯の一枝累々買ひもどる
鬼灯を疊^やに直^{ちか}に枝ながら
鬼灯を活けて白浪増え來^{きた}る

鬼灯のなほ朱からむことを期す
鬼灯のあからむ頃もひと泳ぐ
蟋蟀の無明^{みやう}に海のいなびかり
燈をとりに來し蛾の闇は雨降れり
甲蟲のやはらかき翅なほ餘る
月下にて干潟なること明らかなり
鶏頭の厚き花瓣に日がさせる
亡き父のセルをわが着て日々の露

洋傘^{かさ} つきて 歸る 家路の 海しぐれ
球なくて 電柱 立てり 海しぐれ
鍛冶の 火に 鏽^{このしろ} 焼くと 見て 過ぎつ
寒の 星みな 立つ 天の 北の 壁
暮雪 にて 天に 雪 降る 意^{こころ} なし
雪の 濱 照りつつ 午^{ひる}を 過ぎに けり
出洲の 雪水 激^{たぎ}ちつつ なほの ころ
雪 ゆふべ 手 掴み 洗ふ 馬の 蹄^{つゑ}

虎落笛叫びて海に出で去れり
蜜柑剥いて棄てたるここが陸の果

雜 章

蟹が焚く煙は長き春の暮
かすかなる實の青桃となりゆくも
蟻を掌^ての裏や表に遊ばしむ
霜柱枕邊ちかく立ちて覺む
百足蟲出づ海荒るる夜に堪へがたく

提げゆきし百合の香ここにとどまれる
寄る浪は磯にとどまるちちろ蟲
水清き流れに寄れば鴈のこゑ

昭和十八年

初
詣